

# 編集室

\* 今年も12月を迎え、1年を総括する時期となりました。読者の方々の今年はいかがだったでしょうか？年を取るにつれ一年はあっという間に過ぎていく印象ですが、研究の最先端で活躍されている若い方々にとってはいろんな成長が実感できたのではないのでしょうか？

\* いきなり私事で恐縮ですが、今年は米国人の留学生がホームステイしていて3か月間ほど我が家が国際的な環境になりました。グローバル化、国際化の重要性が叫ばれて久しいですが、子供たちの生活に密着した形で外国人と交流する貴重な経験をきっかけとしてグローバル化について少し考えてみました。

\* 一口にグローバル化といってもいろいろな側面がありますが、ここでは国際人材交流を通じたグローバル化、特に留学生のような若い世代の人材交流を取り上げます。日本という国は、国境の壁（周囲が海）、言語の壁（難解な日本語）等のため、ガラパゴス化に例えられる国内独自技術の先鋭化の弊害があり、世界で通用する技術のグローバル化、イノベーションに対する危機感があります。日本におけるイノベーションを活性化する触媒としての役割を期待できるのが、海外からの留学生であると思います。言語的・文化的背景の異なる多様な人たちが集まり切磋琢磨することで、これまでになかったイノベーションが生まれ、それが日本の新たな成長に直結するという考えです。我が家の例からも実感するように、彼らは自分の意思で日本文化や日本語に興味を持って来日し、学習意欲が高く、行動力もあります。彼らが日本産業の優れた技術を学ぶことでキャリア形成を行い、ひいては日本社会で活躍することを考えると、日本の企業、社会にとってインキュベータ的な可能性を秘めた人材として彼らの力は大きく期待できるのではないのでしょうか？

\* 一方、日本から海外に留学することの効果ですが、これはいうまでもなく国際視野で考えられる人材育成です。日本を覆う閉そく感を打破するために、特に若い人たちに期待したいのは、グローバルな世界を意識し、異なる国や地域の人々とコラボレーションできる素質を身に付けること、“Think Globally, Act Locally.”といわれるようにまずは身近な問題に自分で立ち向かい、グローバル視点を伴って考えられるようにしていくこと、が挙げられます。

\* 残念ながら最近の調査では、海外大学への日本人留学生の数が減少しているようで、新入社員のグローバル意識調査でも、二人に一人が「海外で働きたいと思わない」と回答して「内向き志向」が強まっていることを浮き彫りにしています。景気悪化等と並んで日本の若者の「草食化」がその要因であるともいわれ、具体的にはリスクを避け自分の世界で満足しようとする傾向、内向きになってしまい、冒険をするよりも快適な国内にいるのを好む傾向になっているといわれています。

\* このような状況の原因は、海外の環境に身を置いて得られるものが実感として沸かないからとか、海外情報が容易に得られるのでわざわざ出かける必要性を感じないからとか（ICTの負の面？）が考えられます。しかしながら海外に行くと初めて見えてくるものがあるのではないのでしょうか？ちょうど本稿執筆時に日本人ノーベル化学賞受賞の朗報に沸きましたが、受賞者の根岸先生も内向き志向が指摘される日本人研究者らに対し「若者は海外に出よ」と呼び掛けられました。先生は「ある一定期間海外に出ることで日本を外から見ることが重要」と述べ若者に奮起を促す一方で「日本はComfortable」と皮肉ったとのことでした。

\* グローバル化を推し進める国際人材交流に貢献するための、我々学会誌の役割は何でしょうか？月並みな意見かもしれませんが、やはり国際学術雑誌としてICT技術に関する優良なコンテンツの提供、情報発信を従来どおり続けていって、ボーダレスな世界である科学技術、特にICT技術の国際舞台での研究の魅力を読者の方々に伝えていくことだと思います。その中でもグローバル化の意味付け、海外留学体験談、等の具体的記事を掲載することで、若い人たちにEncourageするような施策も考えていきたいと思っています。

\* 拙文をお読みにになった読者の方々は、本会誌来月号に日本のICT技術と産業のグローバル化を論じた「情報通信分野のグローバル化にどう取り組むべきか？—外から見た我が国のICT産業とR&Dへの期待—」という特別小特集が掲載されますので、是非御一読賜りますようお願い致します。

（編集特別幹事 笹山浩二）